

第7部会

の夫婦が見受けられることである。全体の三割強にあたり、坊号を持つ出家者にいたっては五人中三人が妻帯者である。また、名帳とは別の個所には親子で帰敬している事例も記されている。ここに初期真宗教団における念仏の広がりの特徴を見ることが出来る。このような構成は三河地方に限られるローカルな現象ではなく、例証として真宗門徒の男女がセットで描かれる絵系図がある。真宗佛光寺派本山に伝来する絵系図には、序題を存覚が書いているから、十四世紀の真宗教団の一形態と見ることが出来る。遊君への教化についても、法然聖人の絵伝に描かれるところで、法然聖人在世時からの浄土宗教団の様相を伝えていると言える。

最後にどのように念仏が弘められたのか、念仏興行の具体的内実について考えてみたい。ここにいる念仏興行とは、現在の真宗寺院が行う布教伝道ではなく、法然、親鸞に先行する念仏の形態を想定する必要がある。それを説明するキーワードが『相承日記』の「聖」「念仏ヲ勧進」「名帳」「高田ヘマイル」の語句である。「聖」「念仏ヲ勧進」「高田ヘマイル」については、勧進聖の主体が鎌倉時代に弥陀信仰と聖徳太子信仰を弘めた善光寺聖であったことを示している。三河地方に中世の聖徳太子信仰を伝える建築、彫刻、絵画、書跡が多数伝わるのは、その証左といえる。「名帳」については、日課念仏を記さないだけで聖徳太子信仰と関係の深い融通念仏の名帳に類似している。そのことから当初行われた念仏は、名帳記載とともに融通念仏、踊り念仏、坂東節といった集団的な念仏詠唱であったと考えられる。そのことは、顕智の兄弟弟子である真正が「大念

仏衆」であったことや、『相承日記』の名帳に白拍子の遊君三名が記載されていることなどからも事実として認められる。また、奥三河に多様な踊り念仏が伝わっていることも傍証となる。では、三河の真宗草創期に行われた集団的な念仏詠唱とは、どんなものであったのであろうか。地域は異なるが、毎年八月四日の顕智忌に如来寺と太子寺（ともに三重県鈴鹿市三日市）を中心に行われる「オンナイ念仏会」（三重県無形民俗文化財）が、原初性を伝えるモデルケースとして参考になる。舞踊がないだけで、集団でおんない念仏和讃を詠唱し、行道するという大念仏の形態をとる民俗的鎮送儀である。三河地方では真宗教義に基づく信仰や美術が確立する中で、原始的大念仏は淘汰され、伝承は途絶えたものと考えられる。

存覚における聖道門理解の一考察

赤井智顕

存覚の聖道門に対する理解、すなわち聖浄帰一論や法華念仏同体論といった主張は、末世聖道門による得道を容認するものであり、親鸞には見られない特徴的なものである。しかし、存覚がこの様な仏教理解を語る背景には当然、存覚自身の「聖道門」そのものに対する捉え方が多分に影響していたものと考えられる。

存覚の著述を窺えば、二通りの聖道門理解が存していたこと

を確認することが出来る。一つは「此土の得道をあかす教をもて聖道門とし、他土の得生を期する門をもて浄土宗とす」(『破邪顕正抄』)といわれる、「聖道門」を此土において入聖得果を目指す法門であることを示す浄土宗伝統の理解であり、二つには「聖道と云は聖者の道なり、意は念佛往生は此外に凡夫出離の道也と云はん為なり」(『選択註解鈔』)といわれる、「聖道門」を聖者所修の道であると規定する聖道門理解であった。

ところで存覚が「聖道門」を聖者所修の道であると規定する時、「聖者」とは如何なる存在を意味するものであったのだろうか。この点に関して「外道及び凡夫等は是れ有漏也、聖者の所得は是れ無漏也」(『六要鈔』)とある様に、存覚は聖者を出世間・無漏の者と規定し、凡夫を世間・有漏の者と規定している。またその世間・有漏の者をして、「地前の機等」(『六要鈔』)であるというからには、必然的に聖者は無漏智をおこして煩惱(有漏)を断じた地上の菩薩を指していたとしなければならぬ。もともとこれらの文言でもって、存覚のいう聖者が初地以上の菩薩であったと即断することは出来ないが、他に論究している文言がない以上、看過することは出来ないものであろう。

しかし聖道門の「聖」の意は、そもそも所得の聖果を意味していたもので、直ちに聖者を意味する言葉ではなかったし、浄土門も本来、阿弥陀仏の浄土に往生して証果を得るという、彼土得証の往生浄土の法門を意味していたわけであるから、その言葉をもつて直ちに凡夫出離の道と定義付けすることは出来ないはずである。しかし存覚は、聖道門の「聖」を「聖者」と規定することによって、聖者所修の道とし、その対概念にある浄

土門を凡夫出離の道であることを強調していくのであるが、聖道門を聖者所修の道と論じる存覚の意図は奈辺にあったのだろうか。

この点については、第一に浄土門を凡夫出離の道と決定付ける為であったと考えられる。何故なら聖道門を聖者所修の道と示すことによって、聖道門は末世凡夫の修することが不可能な聖者の歩む道、浄土門は凡夫出離の唯一の道であるという、存覚にとつての明確な聖浄二門の分齊を行うことが可能となるからである。第二には聖道門を聖者、つまり地上の菩薩といわれる様な、聖位の者の修する道であることを示すことによって、末世における他宗の教法そのものの有効性を認めつつも、聖道門の無得道性を孕ませる意図があったのではなからうか。更に第三には、その聖道門による得道の断絶性を示すことによって、同時に浄土門における救済の絶対性を主張する意図があったと考えられる。存覚が他宗の教法による末世得道を容認したのも、この様な聖道門に対する理解が存在していたことに大きく起因するものであり、何も無批判に他宗の教法による得道を容認していたわけではなからう。存覚の論じる聖道門理解は、確かに他宗に対する寛容的立場を宣言するものではあったが、寧ろそれは浄土門の救済の絶対性を強調していく為の、非常に重要な意味を持つ言葉として用いられていたものであり、注目すべきものといえるのではないだろうか。

小論は平成十九年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚深の謝意を表したい。